

戦中―戦後に見る海野十三の人体改変モチーフ

総合研究大学院大学 博士後期課程二年 橘川 智哉

※ 本発表で引用した海野十三の文献および作品テキストは、『海野十三全集』全一三巻・別巻二巻（三一書房、1988.6～1993.1）所収の本文に拠る。また、引用中の（／）は改行を示す。なお、引用にあたり、旧字体は新字体に適宜改めた。

1 はじめに

1920年代後半、逓信省電気試験所に勤務しながら作家としてデビューした海野十三（本名：佐野昌一）は、戦前から戦中にかけて多くの科学小説を発表した。架空の兵器やロボットなどを得意とし、特に戦前から未来の戦争としての日米決戦を描いた軍事科学小説を発表していた海野は、戦争SF作家を代表する人物として知られている。また、その一方で海野は、移植手術や人体改造などの医学上の架空の技術を扱った作品をデビュー初期から発表し続けていた作家でもあった。たとえば、「空中楼閣の話VI 手術万能時代の奇譚」（『新青年』1930.11）では、自身の腕を売って生活費を稼ごうとする労働者が登場し、「俘囚」（『新青年』1934.2）では、外科医の「室戸博士」という人物が、不倫と殺人未遂を働いた妻への復讐のために四肢を切断し、天井裏へ隔離するという話が描かれる。これらの作品は1930年代の怪奇・猟奇的な色合いとユーモアを交えたエンターテインメント性を強く示すものであるが、海野作品はそうした読み物としての面白さだけにとどまらない。「俘囚」の物語の最後では、以下のような人体改造に対する「エンハンスメント」¹の問題に繋がる可能性が示唆されている。

「これが我が国外科の最高権威、室戸博士の餓死体であります！」

あまりのことに、人々は思わず顔を背けた。なんという人体だ。顔は一方から殺いだようになり、肩には僅かに骨の一部が隆起し、胸は左半分だけ、腹は臍の上あたりで切れている。手も足も全く見えない。人形の壊れたのにも、こんなにまで無惨な姿をしたものは無いだろう。

「みなさん。これは博士の論文にある人間の最小整理形体です。つまり二つある肺は一つにし、胃袋は取り去って腸に接ぐという風に、極度の人体整理を行ったものです。こうすれば、頭脳は普通の人間の二十倍もの働きをすることになるそうで、博士はその研究を自らの肉体に試みられたのです。」

「室戸博士」が自身へ行ったとされる人体改造は、「脳」活動の効率向上を図るための「人体整理」であった。「頭脳」を強化するために自らの身体機能を簡略化したのである。こうした身体機能の合理化という面から見れば、妻への報復として博士が施した整形手術も、彼女の身体を効率良く管理することを意図して行った医療行為であったとも考えられる。このように、人体改造を可能とする世界のなかで生じる身体の商品化や身体機能の合理化といった問題が、海野が描き続けてきた科学小説のテーマの一つにあったことは間違いないだろう。

¹ 土屋敦「エンハンスメント論争をめぐる見取り図」（『エンハンスメント論争[身体・精神の増強と先端科学技術]』社会評論社、2008.7）。土屋は「エンハンスメント」とは、「平均的な「正常性」の範囲内に人々の能力、気質、身体能力などを「回復」させることを目的とするのではなく、その「正常性（正常値）」の範囲を積極的に飛び越えて、より優れた能力獲得のために、人間の組織に対する医学的介入を加えることを意味する」と述べている。

戦時下の日本社会において、人体を機械的機能との類似性によって捉える試みは、性の問題や出生観の形成といった問題に具体的に関与し始めていた。たとえばダーウィニズムなどの優生学思想は、実際の断種法（但し任意に基づく）が盛り込まれた「国民優生法」（1940）の成立によって、テクノロジーによる国家的な身体管理を現実のものとした。断種法が制度的にも技術的にも施行可能となったのは1950年代以降のことではあるものの、その議論の下地は当時からすでに見られる。また、移植手術や人体改造は、病気状態の改善や克服を目的とともに発達した技術でもあった。移植手術や人体改造といった言葉が広く認知されるようになるには、第一次世界大戦の影響が大きい。戦争で用いられた爆弾や火薬などは、大量の人間の身体を一度にかつ一瞬にして引き裂くというような、それまでには想像もできなかった科学兵器の脅威をもたらした。そのなかで、治療行為としての人体の改造は〈傷〉を治し、再編成させる期待がもたらされていた技術として広まっていった。

海野作品における人体改変のモチーフは、こうした同時代の思潮の中に位置づけて捉える必要がある問題であるように思われる。テクノロジーや医療の発達に伴って、それまで無秩序であった身体は解体され、臓器や手足の各部を機能ごとに部類分けられ体系的に整理される。こうした臓器や手足の交換・改造を扱う人体の改変表象は部分的身体へのまなざしであるといえる。身体の一部を切り放すことで、そこには所有や贈与といった問題が発生し、個人の意志や主体性の在り処が問われることとなる。また、解体された身体が交換可能な商品として消費や生産の経済に組み込まれることで、集成的身体としての人体は臓器資源や身体資本といった価値や格差を生み出す空間となる。しかしそれは同時に、一つの揺るぎない存在であった生命体が、部分的なパーツが寄せ集まった総体に過ぎないことを示すものでもあったのだ。

こうした身体とバイオテクノロジーとが交錯する領域は、〈生権力〉と多くの問題を共有している。身体がテクノロジーによって切り開かれ、そこに支配と被支配の相補的な同意関係に基づく生命維持の規定が行われ、生命体が管理されるというような一連の人体の領域は、極めて政治的な空間であるといえる。ミシェル・フーコーのいう「生-政治」²とは、「生とそのメカニズムをあからさまな計算の領域に登場させ、〈知である権力〉を人間の生の変形の担い手に仕立てる」²ものである。そして、その発展には、身体の内面・外面を大きく変容させる国家間の戦争状態とそうした傘下に生きる人々とのあいだに生じる権力関係が影響している。フーコーによれば、19世紀以降の時代の戦争における「大量殺戮」がもたらした「死に対する途方もない権力」は、「生命に対して積極的に働きかける権力、生命を経営・管理し、増大させ、増殖させ、生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力の補完物」となり、「権力というものが、生命と種と種族というレベル、人口という歴大な問題のレベルに位置し、かつ行使される」という。身体の規律や人口の調整の二極にかかわる〈生権力〉の組織化は、こうした生命と生存にまたがり管理を行うことを可能とする「戦争のテクノロジー」の脅威と相補的な関係にありながら強化されていったのである。

戦中期の日本において、臓器、脳、腕などの身体部位は、移植手術による治療への期待が目論まれながらも、技術面において免疫による拒絶反応などの生理的現象を発見・克服するには至らず、現状的にはいまだ交換不可能な領域であった。しかし、科学技術の向上による身体解剖は、個人を資本主義や国家的な権力装置に組み込むという側面も担って社会の認識のなかに浸透しつつあった。そうした奴隷的身体の認知が形成されつつあるなかにあって、いまだコントロールされ得ない心臓、肺、脳といった空間は、権力による身体の支配を逸脱するものとして捉えられるだろう。

終戦の日の前後に、海野は一家心中を計画した。遺書まで用意した心中は未遂に終わったものの、「海野十三は死んだ。断じて筆をとるまい。」と日記に書き込み、海野は以降二年間を

² ミシェル・フーコー『性の歴史 1 知への意志』（渡辺守章訳、新潮社、1986.9）

「丘丘十郎」名義で作家活動を行っている。こうした海野のなかにある〈傷〉としての明確な戦中・戦後の線引き意識が、一貫して描き続けていた人体改変のモチーフとどのような影響関係にあるのか。海野のテキストをいくつか確認しながら、人体が改変されていくという身体表象を海野自身の身体＝主体性が生起する場として捉え直すことで、戦後の海野十三の科学小説の意義を考察したい。

2 戦時下の「科学」意識

戦前期から多くの軍事科学小説を発表していた海野にとって、現実のものとなった太平洋戦争は、長山靖夫が言うように「彼が空想した悪夢が、もっとも苛酷な形で現実のものとなる事態だった」³といえる。海野は、初の長編「空襲葬送曲」（『朝日』1932.5-9）でいち早くアメリカ軍機による日本空襲を描き、以降も「空襲下の日本」（『日の出』別冊付録、1933.4）、「空襲警報」（『少年倶楽部』別冊付録、1936.7）、「防空戦線」（『少女倶楽部』1937.9）など、「防空」をテーマとした作品を多数発表し、「防空小説の第一人者」⁴として知られていた。こうした彼の「防空」意識は、彼が強調していた「科学」と「科学小説」の必要性とも接続している。海野は、『地球盗難』（ラヂオ科学社、1937.4）の「作者の言葉」のなかで、以下のように語っている。

科学に縋らなければ、人類は一日たりとも安全を保証し得ない時代となった。[…] 開戦と同時に、戦争当時国は手の裡にある新兵器をチラリと見せ合っただけで、瞬時に勝負の帰趨が明かとなり即時休戦状態となるのかもしれない。勝つのは誰も愉快である。しかし若し負けだったら、そのときはどうなる。世界列国、いや全人類は目下科学の恩恵に浴しつつも同時にまた科学恐怖の夢に脅かされているのだ。

このように、恩恵と迫害との二つの面を持つのが当今の科学だ。神と悪魔との反対面を兼ね備えて持つ科学に、われ等は取り憑かれているのだ。斯くのごとき科学力時代に、科学小説がなくていいであろうか。否！ 科学小説は今日の時代に必然的に存在の理由を持っている。それにも拘らず科学小説時代が来ないのはどうしたわけであろうか。

海野は、「科学」を「恩恵と迫害との二つの面を持つ」ものとして捉え、「科学小説」は、そうした「科学」を正しく理解する上で必要不可欠なものであると主張する。また、それは来るべき「開戦」に備えての防衛意識から生じたものであり、海野の捉える「科学」とは、必然的に戦争を内包したものであることが窺えるだろう。戦中でも同様に、「科学記事は斯くあらねばならぬ」（『読書人』1942.2）という短い記事において、戦争報道について「私の遺憾としたのは、解説記事に於て、科学的なるものがまことに寥寥たることであつた」として非科学的な報道のあり方への批判を行った上で、「科学小説によつて、大いに宏遠なる科学性を附随してもらひたい」と語っている。軍事科学小説を発表し続ける彼の動機は、最新の「兵器」がいかなる威力を持つのかを描きつつ空襲に対する危機意識を示すことで、その「科学」性を読者に養おうとするところにあつたのだ。

また、こうした「科学」に対する意識から、海野は海軍の軍事活動に積極的に関わっていた。1941年8月、海野は海軍外郭団体である「くろがね会」を発足し、海軍兵向けの月刊誌発行に携わっていた。同会は後に海軍の作家徴用の母体となる団体であり、「大下宇陀児、海

³ 長山靖夫「解説」（『海野十三敗戦日記』中公文庫、2005.7）

⁴ 瀬名堯彦「解題」（『海野十三全集 第四巻』1989.7）

野十三氏らが音頭をとつて大衆と密接な接触をもつ作家」⁵らで構成されていた。さらに、1942年1月には、海野は海軍報道班員として徴用されて、パラオやラバウルといった南方にも赴いている。ラバウル派遣中に以前から患っていた肺結核が再発し、またデング熱や、火山灰によって病が悪化したために、5月には帰還した。帰国後の1923年末には、海軍に従軍した作家たちで「海作班」（海軍報道班文学挺身隊）を結成して、海軍の要請に応えた文学作品を提供するなど、徴用以降も積極的に海軍との関わりは続いていた。

戦中の海野のいくつかの作品は、『くろがね会叢書』のなかでも確認することができる。本誌は「くろがね会」編纂発行の月刊誌であった。表紙には「海軍軍用図書／海軍部外持出厳禁／不許部外配布閲覧」との記載があり、前線に向かう海軍内部で流通していた雑誌であったことが窺える。本誌「第二七輯」（1945.2）には、「奇想・科学小説輯」として海野の短編「見えざる敵」「軍用鮫」「時間機械」「スパイ学校の卒業試験」「特許多腕人間方式」「大四次元の男」の計六作品が収録されている。

そのなかのひとつである「特許多腕人間方式」（初出は『現代』1941.2）は、発明マニアである田方堂十郎が、「機械的な腕」を取り付けて人間の腕をもう一つ増やす発明を成功させ、弁理士のもとに「三本腕」の特許出願を依頼するという物語である。彼によれば、人間は「三本腕方式」になることで「従来の職工の一人半」の仕事量が可能となるという。これが「義手」と異なるのは、この腕は欠けてしまった腕の代わりに用いるのではなく、腕関節の運動と無関係に身体に取り付けるものであるということにある。博士は「二本の腕は、ちゃんと満足に揃っているが、その上にもう一本、機械的な腕をつけて、都合三本の腕を人間に持たせようというのだ。これまでに、世界のどこに人間に三本の腕を持たせようと考えたものがあるか」と自身の発明の有用性を語っている。ところが、特許申請が無事審査を通ると、この権利の買い取りを希望する人物たちが現れる。彼らはこの特許を「新兵器」のために方法することを語り、次のように続ける。

兵隊さんの腕が、三本に殖えると、逆も強くなりますよ。たとえば、射撃をする場合を例にとりますとね、一本の手は銃身を先の方で握り、他の一本の手は、遊底をうごかし、そしてもう一本の特許の腕は引き金を引く。そうなると小銃の射撃速度は、たいへん速くなります。また、白兵戦の場合でもそうです。敵と渡りあうとき、敵の二本腕に対して、こちらの二本の腕で五分五分の対抗が出来ます。そうして、敵の二本腕の活動を阻止しておき、こちらは特許の三本目の腕を、そろそろ繰り出して軍刀を引っこぬき、ぶすりと敵の背中を刺して倒します。そうなれば、三本腕の兵の方が、絶対優勢です。

彼らが語る「多腕人間方式」は、兵士の身体機能の向上のために用いるものであった。「国防方面」のための人体改造がここに盛り込まれるのである。彼らはこの権利の買い取りのために「二百万円」を差し出した。それを弁理士が田方に伝えたところに、その着想が動物図鑑に載っていた象であったことが明かされ、「大発明のタネは、極めて身近に転がっているのだ。ただ、その人が、気がつかないだけのことである」として物語は終わる。身近なところにある人体改造のアイデアが、戦争兵器に活用されることで多額の価値を生み出すという構図がここから見てとれるだろう。

戦時下に海野が発表した作品のなかで、人体改造が描かれている作品がもう一つある。「諜報中継局」（『新青年』1944.12）である。本作は海野の『新青年』誌上での最後の作品であっ

⁵ 「くろがね会愈発足」（『東京朝日新聞朝刊』1941.8.17）。また同記事には「海防義会の上田海軍中将海軍省田代中佐をはじめ作家および関係者約四十名が参集、差し当り来月十日盛大に結成式を挙ることになった」とある。

た。戦時下のアメリカを舞台に、戦争を操る黒幕に「影の大統領」がいるという情報をつかんだ国籍不明の団体「諜報中継局Z85号」がその内実を傍受していくという物語である。そして、ここでは、戦死者の身体から人体を作り出す「人体集成手術」が描かれている。その中でマスナー博士という学者が語った「人体集成手術」とは、「戦死者の身体より、健全なる部分を切取り、その腐敗前に処置をなし、分類して長期保存に耐えるようになし、それから時を見て」施す、というものであった。博士はこの手術によって「頭部は兵士C、肩から下腹部までは兵士A、脚と血液は兵士Bの集合体」ができるという。メアリー・シェリーのフランケンシュタインの怪物を彷彿とさせるこの兵士は、「戦死」してしまった「人的資源」の有効活用という側面を強く見せるものである。戦局が長期化する中でいかに「戦力」を補うべきかという問題に人体改造の技術が用いられるのである。

「特許多腕人間方式」せよ、「諜報中継局」にせよ、人体改造手術によって得た人体機能の「エンハンスメント」が、戦争の兵器のために使われるという点は共通している。戦前期の「俘囚」における人体改造は「頭脳」を増強するとどまるものであったが、両作品では兵力の強化という側面ばかりが強調される。このように、戦時下における海野の人体改造のモチーフは、当時の時局を色濃く反映させながら、身体空間を武器という機能のみに一極化してしまっていることがわかる。

3 日記のなかの〈傷〉

「防空」専門の作家として科学小説の必要性を説き、海軍報道班への協力などを行ってきた海野は、本土空襲が本格的となり始めた時期の1944年12月7日から「空襲都日記」を付けていた。この日記は、海野十三の死後16年たった1965年、英夫人の協力によりその一部が公開され、生前から海野と交流のあった新聞記者橋本哲夫によって、『海野十三敗戦日記』（講談社、1971.7）として刊行された。日記の「はしがき」は以下のように始まっている。

二週間ほど前より、帝都もかねて覚悟していたとおり「空襲される都」となった。

米機B29の編隊は、三日にあげず何十機も頭上にきて、爆弾と焼夷弾の雨をふらせ、あるいは悠々と偵察して去る。

見方の戦闘機の攻撃もはげしくなり、地上部隊の高射撃もだいぶんうまくなった。被害は今のところ軽微である。

これからさらに空襲は激化して行くであろう。そこで特に、この「空襲都日記」をこしらえ、後日の用のため、記録をとっておくことにした。

1944年11月24日に始まった関東・東海地方の大規模空襲を受けて、「空襲される都」として、これから本格的に激化する空襲を海野は予感している。また、この「はしがき」の後には「これまでのことを簡単に」として、海野が得た空襲に関する様々な情報がまとめられている。内容は主に新聞やラジオで得た知識、そして実際に見た景色、そして海野家族のことなどであった。こうした海野の日記からは、これまで数々の「防空」小説を書いてきた作家・海野が、空襲の実態を「記録」としての残そうとする意識が窺える。また、「はしがき」の末尾の署名が「一九四四年十二月七日／海野十三」と記されている。本名の佐野昌一ではなく、ペンネームである海野十三を使うことで、あくまでも作家「海野十三」として日記を記録するという体裁のもとで「空襲都日記」は作成されたのである。

では、この「記録」は以後どのような変化を見せたのだろうか。「空襲都日記」は、1945年5月1日に一度終わっている。翌日から海野は新たなノートを用意し、「降伏日記」と題して

日記を再開した。この日記の始めには、「この騒然たる空の下、事実を拾うのはなかなか困難であり、それを書きつけるは一層難事であるが、私としては出来るだけ書き残して生きたいと思う。／昭和二十年五月二日／ヒットラー総統死去のラジオ報道を聴いた夜／海野十三」と記されている。空襲や戦災に関する情報が軍の報道統制によって厳しく制限されていくなかで、正確な「記録」を付けることは困難であった。「記録」としての日記の表明は未だ行っているものの、その位置付けは敗戦が近付くにつれてさらに揺らいでいくこととなる。

海野の日記の文体に大きな変化が見られたのは8月9日のことである。この日、大本営発表で広島に落とされた新型爆弾の被害の詳細を知った海野は、「敵が追い追いと新しい威力を備えた新兵器をくり出す事は、かねて予想された事であって、今さら驚くに当たらない」と述べ、被害の状況や今後の対策などを書き留めていた。しかし、同日に「北満及朝鮮国境をソ連軍が越境し参戦」したとのニュースを知った後、その文体は切迫したものとなっていく。「ああ久しいかな懸案状態の日ソ関係、遂に此処に至る」や「もうこれ以上の悪事態は起こり得ない」、「果して負けるか？ 負けないか？」などといった言葉に続いて、海野は「わが家族」に向けて次のように語る。

一家の長として、お前たちの生命を保護する大任をこれまで長く且ついろいろと苦しみながら遂行して来たが、今やお前たちに対する安全保証の任を抛棄するの已むなきに至った。

おん身らは、死生を超越せねばならなくなったのだ。だが感傷的になるまい。お互いに……。

われら斃れた後に、日本亡ぶか、興るか、その何れかに決まるであろうが、興れば本懐この上なし、たとえ亡ぶともわが日本民族の紀元二千六百五年の潔きよき最期は後世誰かが取上げてくれるだろうし、そして、それがまた日本民族の再起復興となり、われら幽界に浮沈せる者を清らかにして安らかな祠に迎えてくれる事になるかもしれないのである。

この期に至って、後世人に嗤われるような見苦しき最期は遂げまい。

わが祖先の諸霊よ！ われらの上に来りて、俱に戦い、共に衛り給え。われら一家七名の者に、無限不尽の力を与え給わんことを！

戦争の長期化や相次ぐ戦況悪化の報道を知るなかで、海野の日記は、「記録」という形式からはほど遠い激しい語調で「一家の長」としての宣言を行っている。空襲を「記録」という本来の目的が崩れつつあった地点に立つ海野の日記は、ここで個人の「記録」を大きな「日本民族」の歴史の中に位置づけようとしている。一方で、翌日の8月10日に新型爆弾が「原子爆弾」であることを知った海野の語調は「戦争は終結だ。／ソ連がこの原子爆弾の前に、対日態度を決定したのも、うなずかれる」と再び冷静なものとなっていた。

吉川麻里はこうした海野の「突然の文語体表記の不自然さ」に注目し、そこに「日記の根本の存在形式において、決定的な断絶」があったとする⁶。吉川は、日記というメディアを「〈自己〉との対話としての日記」として捉え、その〈自己〉設定の様式が、海野の場合は「いま・ここ」との連続にない曖昧化された「後日」にあったと分析する。そうすることで海野の日記は、ただ空襲という事象自体を「記録」するだけの傍観者の位置を得ていたのである。しかし、敗戦がほぼ決定となった段階において、海野の日記はそうした「後日」を曖昧化することが不可能となり、〈自己〉の立場を設定する立脚点を失ったという。そして、「対話という形式の崩壊した日記は、「一家の長」としての位置を「家」—「祖先」—「大君」へと結ぶ〈物語〉の中に求める求心的な語りと、観察者として俯瞰的位置に立つことで立脚点を無化

⁶ 吉川麻里「断絶された〈風景〉への対話—「空襲都日記」の「海野十三」—」（『日本近代文学』2000.10）

しようとする遠心力とに揺らぐのだ」という。不安定な文体と海野自身の戦争に対する自身の立場の揺らぎは日記を書き続ける動機を不明瞭にさせていく。そこには「防空」の専門家として空襲を観測するという作家・海野の姿はなく、ただ家族と自身の進退を案じる等身大の佐野昌一がいるばかりである。こうした戦争との関連性を断絶させるため、海野は「海野十三」という作家名を放棄することをやがて選択していくことになる。

先にも述べたように、海野は終戦の日の前後に一家心中を計画していた。彼が心中のことを考えたのは、先にみた8月9日前後とされる⁷。8月10日の日記のなかで海野は「原子爆弾創製の成功は、かくしてすべてを決定し、その影響は絶対である。／各国共に、早くからその完成を夢みて、奔走、競争をやってきたのだが、遂にアメリカが第一着となったわけだ。」と早くも戦争の終結を悟った。そして、8月12日には妻に向かって「敵兵が上陸するのなら、死んだ方がまだ」という決意を示している。家族とともに身辺整理を済ませて遺書まで作成したものの、医師から青酸カリをもらえなかったことや海軍報道班の作家仲間であった湊邦三らの説得により、結果的に海野の心中は未遂のままに終わることとなった。そうしたなかで海野は8月26日の日記に以下のような言葉を残している。

今日は放送の二つを聴いて、洗心させられた。一つは陸軍大臣下村大将の「陸軍軍人及び軍属に告ぐ」の平明懇切なる論、もう一つは頭山秀之氏の「新日本への発足」という話で、日本の負けたのは敗戦のはじらいと苦しさを知らざりしによるとなし、この上は堂々と負けて、責任ある支払いをなし、敗戦という宝物を生かして行こうという。涙が出て来て仕方がなかった。両氏とも、昔なら検閲にひっかかる底のつつこんだ話をした。こうなくてはならない、本当のものを発見し、自覚し活用するには。

海野十三は死んだ。断じて筆をとるまい。口を開くまい。辱かしいことである。申訳なき事である。

結果的に戦後を生きざるを得なかった海野にとって戦中との連続性を断つ行動が、このように作家「海野十三」の名を消滅させることであったのだ。海野は「敗戦のはじらいと苦しさ」を「敗戦という宝物」に変えて戦後を生きるために「責任ある支払い」でもって精算を行うことを述べている。それが「海野十三」の死なのである。吉川はこうした海野の宣言を「日記における〈自己〉像の葬送の表明である」⁸としている。たしかにこれは日記を書けなくなった海野が要請した必要不可欠な犠牲として、戦中と戦後を断絶するものであった。

しかし、ここで注目したいのは、そうした表明が作家名のなかに内包する固定化されたイメージの放棄にのみ限定されているということだ。心中の代替措置としての作家名の死は、そのまま海野の創作活動の休止を意味するものではなかった。戦後からの二年間を海野は「丘丘十郎」というペンネームで作家活動を行っている。そして、その後は再び「海野十三」の名を使い始めるようになり、結果として「海野十三」の名は完全に消滅したわけではなかった。

「海野十三」の名は「丘丘十郎」を経た後にまた用いられるようになるのである。このような戦争の〈傷〉としての「海野十三」の消失と、〈傷跡〉として使われた「丘丘十郎」、そして〈傷〉の〈回復〉としての「海野十三」という過程のなかに、戦中戦後の断絶を結ぶ一つ連続性を見出せるのではないだろうか。「海野十三」を再び得るにいたるなかで「丘丘十郎」はいかなる方向性を打ち出したのか。「海野十三」という作家の主体性の回帰を考える上で、「丘丘十郎」が発表した作品に注目したい。

⁷ 橋本哲夫「愛と悲しみの祖国に」(『海野十三敗戦日記』講談社、1971.7)

⁸ 吉川麻里(前掲)

4 〈自己回復〉としての物語

揺れる自己像との決別のために海野が用いたペンネーム「丘丘十郎」を、そのまま「海野十三」と結びつけて扱うことには慎重でなければならない。しかしながら、この名の使用が、デビューから築き上げた「防空」作家としての「海野十三」像を、戦後の時代を迎えるにあたって断絶せねばならない必要性に迫られたことに端を発するものであったことは間違いないだろう。作家の傷ついた自己像という主体的な身体性の所在を考えるにあたって、「丘丘十郎」名義での短編として戦後初めて発表された「大脳手術」(『富士』1945.11)のなかで描かれている人体改変の表象を分析していきたい。

「大脳手術」は、金策に翻弄される閻川吉人^{やみかわきちんど}が、身体のあるゆる部位を売買していく物語である。友人である鳴海三郎に反対されながらも、閻川は身体を売り続けることをやめない。香西豊子は、ドナー(臓器提供者)とレシピエント(移植希望者)のあいだにひろがるドネーションの「倫理」の問題を「一つは、「人体」を資源や商品へと変質させ、そもそもの闘争状態を生み出している、資本主義なり、科学・技術なりへの批判、今一つは、その現状を受容し読み替えようとする「贈与論」である」⁹と説明している。臓器移植にまつわる経済体制や技術への批判は、「人体」の「外」を諸悪の根源とするものであり、また「贈与論」とは誰もが潜在的なドナーでありレシピエントである状況を「共存の哲学」や「共同体的な平等性」に立脚して展開されたものである。人体の資源化・商品化論は、日本では1990年代半ばごろから立ち現れた議論であるが、こうしたテーマを海野が戦後すぐに持ち込んだことには注目しておきたい。たとえば、閻川と鳴海の話のなかには以下のようなやりとりがある。

「だがねえ鳴海。この世には、そういう商売も有っていいじゃないか。老境に入って手足が思うようにきかない。方々の機能が衰えて生存に希望が湧いてこない。そういう時に、若々しい手足や内臓が買取れて、それが簡単なそして完全な手術によって自分の体に植え移され、忽ち若返る。移植手術、大いに結構じゃないか」

「いや、僕は何も移植手術そのものが悪いといっているのじゃない。移植手術のすばらしい進歩は、人類福祉のために大いに結構だ。しかしこの種の手術を施行するについては、瀬尾教授のやっておられるように、飽くまで公明正大でなければならぬと思う。つまり瀬尾教授の場合は、例えばここに交通事故があって肝臓を破って死に瀕した男があったとすると、これを即時手術してその肝臓を摘出して捨て、それに代って、在庫の肝臓を移植する。その肝臓というのは、肝臓病ではない死者から摘出し、予て貯蔵してあったものであり、そしてそれはその遺族が世界人類幸福のために人体集成局部品部へ進んで売却したものなんだ。まあこういうのが公明正大で、瀬尾教授の手術を受ける者は一点の後ろめたいところもない。これでなくちやいかんよ (以後、引用部分の下線はすべて報告者による)

現代における臓器移植の大きな課題として、臓器提供者の生死判定の有無を問うものがある。閻川は、「老人」の若返りの術として、生体移植手術を推奨する。一方で、それに反対する鳴海が「公明正大」としているのは、脳死下提供・心肺停止下提供による移植手術である。死んだ者の身体が「世界人類幸福のために」役立つという身体の有用性を鳴海はここで強調し

⁹ 香西豊子「記述のなかのドネーション」(『流通する「人体」—献体・献血・臓器提供の歴史』勁草書房、2007. 7)

ている。闇川と鳴海の議論は、対立しているように捉えられるものの、人体を移植手術でもっていかにも有効活用すべきかという方向性は共有している。特に、市場原理における「人体」の流通を否定し、「人類福祉」の共通の財産としての「人体」の有効的な活用を推奨する鳴海の姿勢は、ドネーションの「倫理」が持っている「贈与論」の基盤を示すものであるといえるだろう。

本作はこうした問題を内包させつつも、闇川は「或いは心臓を売り、或いは背中一面の皮を売りなどして、内臓といわず何といわず、次から次へと売飛ばして」生活費を得ていくことをやめない。彼は自身の身体を売買することに抵抗を持たないのだ。そして、自身の眼球や歯、耳、顔の皮膚までも売ってしまった後になって、闇川は次のような問題に直面する。

或るとき、私は囚らずも一つの問題に突当った。それは外でもない。こうして容貌も変わり、声も変わり、四肢から臓器までも変り果てた現在の私は、果して本来の私といえるかどうかという問題であった。こんな苦を経てきたというのも、元々本来の私というものが可愛いいためであった。ところが、よく考えてみると、本来の私というものが、今では殆んど残っていないのである。残っているのは脳味噌だけだといっても過言ではない。あとは皆借り物だ。質の悪い他人の部品の集成体だ。そんないい加減の集大成が、果してやはり愛すべき価値があるかどうか、甚だ疑わしい。

闇川がもともと備えていた「本来の私」は、金銭と引き換えに得た「質の悪い他人の部品の集合体」としての身体に変わることによって失われる。自らの生活のための身体売買が、いつのまにか「本来の私」を見失うことになるのだ。ここでいう「本来の私」とは、闇川が持っていた自己の身体性であるということ言うまでもない。尹小娟は、こうした自己の身体の部位を拡散してしまう闇川に「戦時中自分の科学者としての立場を徐々に失っていった海野の姿」¹⁰を重ね合わせている。だが、ここで注意しておきたいのは、彼が最後の「本来の自分」としていまだ「脳味噌」を所有していることである。物語において、闇川は完全に自己を失ってしまったわけではない。身体を売りさばいた闇川にとって、最後に残ったのは自身の「大脳」であった。身体資本の限界に達した闇川は、自身の「大脳」を「動物園につながれている若きゴリラの大脳へ移植」する。そうすることで、「漫測たるゴリラの測り知られぬ精力を自分のもの」としている。そして、動物園でおだやかに過ごす彼の前に、闇川吉人の見た目をした人物が現れるのだ。

その男——わが檻の前に立ち、熱心にこっちを覗いているその男——その男の顔、肩、肉づき、手足、全体の姿、そのすべてがなんと曾つての本来の私そっくりであったではないか。私はその瞬間、万事を悟った。

(貴様だな、俺の両脚から始めて両腕、臓器、顔などと皆買い集めてしまったのは……。貴様は、俺のものをそっくり奪ってしまったのだ。買取るならそれもよろしいが、そのように俺のものを全部集成しなくともよいではないか。殊にこれ見よがしに、俺の檻の前に立つとは怪しからん。……だがな、貴様はまだ俺からその全部を奪っているのではないのだぞ。脳細胞のことよ。肝心の脳細胞は、今ちゃんとこうしてこっちに有るんだ。あはは、お気の毒さまだ)

私は腹を抱えて、ごうごうと笑ってやった。するとその男は、私の言葉を了解したと見え、急に恐ろしい形相となって、私の檻へ歩みよった。

¹⁰ 尹小娟「海野十三における南方体験-科学小説を視座として-」(『九大日文』九州大学日本語文学会、2018.3)

人体＝商品という規範から逸脱した〈動物〉の身体としての「ゴリラ」。閨川は、自身の「脳」を若い身体を持つ「ゴリラ」に移植することで〈動物〉の「生」を獲得する。ただしそれは、閨川のアイデンティティ＝「脳細胞」が乗り移った〈器〉としての身体でしかない。最後に現れた閨川の分身は、人間としての商品的価値を有していたかつての自身の〈器〉であった。閨川は、その分身＝過去の自己の身体に敵対心をあらわにし、最終的に「ゴリラ」の〈器〉を得た閨川が分身に噛みついてこの物語は一旦幕を閉じることになる。身体と身体のあいだを「本来の自分」＝自己という意識が移動し、新たに獲得した身体は人間社会を逸脱し、圧倒的な暴力性を備えている〈動物〉という超越的存在となり、過去の自己をなきものとする。こうした、ある身体から別の身体へ自己の意識の移しかえ、新たな身体が過去の身体を消滅させることで新たなアイデンティティの形成を図るところに、本作の人体改変の表象は機能しているといえるだろう。

しかし、本作の人体改変のモチーフは過去の自己に噛みつく「ゴリラ」という存在を生み出すだけにとどまらない。「大脳手術」は結末部分で、ここまでの物語が戦傷によって脳に圧迫障害を受けていた患者の「手記」であったことが明かされるのである。

以上は、第三十四号室の患者〇〇〇〇氏の手記である。同氏は本日余の執刀によって大脳手術を受けることになっているものであるが、氏の錯倒精神状態はこの手記によって自明である。だが、これは精神病ではなく、弾片によって脳髄に受けたる圧迫傷害に基づくもので、大脳手術を施すことにより多分恢復するだろうと思われる。

なおこの手記は極めて興味のあるものであって、患者の脳症を顕著に示しているが、しかし氏が斯る患者であるとの予備知識なくして一読するときは、一つの纏まった物語として受取れる。しかしこの物語の中にある事件は大部分が実在したものではない。

身体間を移動する自己の在処をめぐる物語は、患者の「手記」であったことが明かされることで、戦傷兵の主体性という問題へと接続される。戦争における精神病をめぐる問題について、当時、国府台陸軍病院の院長であった諏訪敬三郎が「要するに戦場に於ける精神的疾患と見なされてゐるものも、その大半は既に戦場に赴く前に発病してゐるものである、或は又すくなくとも発病すべき条件を十分に備へてゐたのである」¹¹というように、戦傷患者自身の内面的性質にそもそも備わるものとされていた。中村江里はこうした陸軍や医師の言説に「過酷な戦場の状況や軍隊内務班における「私的制裁」などが兵員の精神に及ぼす深刻かつ長期的な影響を見過ごし、ひいては戦争と精神疾患に関する軍部の責任を免責する論理」¹²につながる問題があったとし、またこうした問題が戦後日本社会において戦争精神疾患患者の認識を拒む要因でもあったと述べている。

閨川の疾患は、「脳髄」の「圧迫障害」であるために「大脳手術」という医療行為によって治療可能となる〈治る病〉であることが示唆されている。ただし、それは「精神病」によるものではなく、あくまでも戦傷によるものとも述べられている。すなわち閨川の「手記」は彼の内面的な脆弱性や逸脱性に起因しない彼自身の〈声〉として位置づけられるものだろう。そして、本作の結末では以下のように締めくくられる。

吾は、不幸なる閨川吉人が、幸いに瀬尾教授の手篤き手術によりて、戦前の如き健全な

¹¹ 諏訪敬三郎「戦争と精神病」(『文藝春秋』時局増刊号、1939.7)

¹² 中村江里「戦争の拡大と軍事精神医学」(『戦争とトラウマ—不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館、2018.1)

る彼にまで快復することを祈念してやまざるものなり。

患者である闇川でも医者である「余（＝瀬尾教授）」でもない、第三者の「吾」によって闇川は「不幸なる闇川吉人」という位置付けが与えられている。ここでいう「吾」が、そのまま物語の語り手を指すのか、あるいは「丘丘十郎」を指すのかは定かではない。ただ彼は戦争で傷ついた闇川を「不幸」として捉え、そこからの「快復」を祈念している。

純粋な「外的要因」のみから生み出された闇川の「手記」は、精神病患者と医師、〈傷〉を生む戦争とそれを治療する医療というサイクルのなかに生じたノイズでありながら、一つの完成されたフィクションとして〈狂気〉語りといった文脈からも逸脱していくような可能性に開かれていたといえる。しかし、それが戦傷者の〈傷〉という戦争が生み出した大きな「不幸」の物語の一つとして、最終的には語り手「吾」によって回収されてしまう。闇川の「手記」が戦争による〈狂気〉の語りとして〈健常者〉の枠組みの中に再配置されることの暴力性を本作は示しているのである。と同時に、本作におけるこうした構図からは、〈戦後〉という空間に生きることを表明した海野が過去の自己＝「海野十三」と決別し、「丘丘十郎」となることで自己同一性の回帰を図ろうとする〈傷跡〉の表象を見出すこともできるだろう。衰弱した自己像は、人間社会から逸脱した存在である〈動物〉へと転化し、それが戦傷による治療を示唆するかたちとなって〈回復〉が祈願されている。このような身体と主体性の移動をめぐる戦後の海野の人体改変のモチーフを〈自己回復〉の物語として見るところに、戦中と戦後を結ぶ「海野十三」像の模索があったのではないだろうか。